

あそびはらっぱものがたり

——ふゆ——

すとうあさえ

ものすごい大風が吹いたある日、あそびはらっぱ

は、予定を変更してゴミ袋片手に園庭に飛び出し

た。袋に風を捕まえようとかけまわる子、袋をマントにして風に身を任せている子。みんな身体中で風の力を感じていた。暑くても寒くても関係ない。子どもは、まさに“風の子ども”。では、あそびはらっぱものがたりのはじまり、はじまり。

たき火だ、たき火だ

年が明けて一回目のあそびはらっぱは、たき火。園庭には保育で野菜スープを作つたりするため、ブロックで簡単なかまどが出来ている。そこに小枝や枯れ葉を集めてきて、火を起こす。「今日はたき火ですよ」と発表したとたん、「ぼくが火をつける。

マッチでつける」と意志表明したK君。言葉通りにマッチをシュツ、シュツとすつて頑張っている。何回トライしたかな、なかなか火が着かない。それであきらめない。口をとんがらかして、しゃがみこんで、かまどとむかいあつたまま何度もやつてみる。十分くらいたつた頃、シュツと火がついた！

K君には感動している余裕はない。「熱い！」かまどにマッチを投げ入れたとたん、マッチの火は一瞬にして消えてしまった。「あーあ」と思わず落胆の声をあげた私を無視して、K君は再びトライし始めた。男の子が何人か寄ってきて、K君の手元を見て行くが、「ほくもやつてみる」という子はない。

私は、今度火が着いたら、すぐに新聞紙に火をうつせるように、新聞紙を丸めて手にしつかり持つて待機する。そして、とうとうマッチに火がつき、新聞紙にもめでたく火がうつり、かまどにそのまま入れて急いで小枝を重ね、あおぐ。火がひょろひょろ大きくなつた。まずは大成功。K君に「やつたね」と

言つて拍手。そばにいて見物していた女の子たちも「すごい」と言いながらパチパチ。K君は照れたような笑みを浮かべて、満足そうに一言。「ぼく、遊んでくる」。

後日、K君のお父さんにこの火のことをお話ししたら、「キャンプにいつても、家でも自分でマッチを使うことはなかつたはず」とのこと。なんで、K君がこの日こんなにマッチで火をつけることに頑張つたのかは、わからない。きっとすぐすぐやってみたかったんだね。大人には慣れきつた小さい事でも、子どもたちにはたまらなくやつてみたいことが、この世の中にはたくさんあるのだろうなと思う。さて、たき火の番は私。下ゆでしたお芋を子どもたちとアルミホイルに包んで火の中に入れた。火をいじりながら、お芋が焼けるのを待つ……なかなかいい時間。子どもたちは、時々やつてきては火に葉っぱや枝をいれていく。「まだ?」といいながら、お芋をつつついしていく。

千春さんと千恵さんは、園庭で割り箸鉄砲やさん

幕。

縄文人になろう！

鐵砲で、弾は輪ゴム。ひたすら、撃ちまくっている子もいれば、ＫＯ君は地面に落ちた輪ゴムを拾い集めて他の子に分けてあげることを楽しんでいる。撃ち合いの基地にと、大きな段ボールを園庭に置いておいたところ、女の子たちの希望で「お家」に変更になる。基地がマイホームに……平和で何より。

もうそろそろあそびはらっぱが終わるという頃、子どもたちが見守る中、待望の焼き芋を一つ出してかじってみた。「あっ、おいしい！」みんなも、さっそく食べ始める。アツアツのお芋をふうふういいながら食べるには楽しい……しかし、恐ろしいことに、芋の中心がまだかたかった。「かたーい！」と口々に不満の声があがる。私たちも「かたーい！」。下ゆでを十分にすれば良かつたと深く反省。柔らかい所だけ食べて、後にはりんごの芯のような姿のお芋が残つて、本日のあそびはらっぱは

人はいつから、火を使い始めたのだろう。北京原人の遺跡には、灰が化石になつて残つていたそうだ。ということは、四十万年から五十万年も前に、火が生活に使われていたということになる。すごいなあ。今はマッチやライターですぐに火をつけることが出来るが、大昔の人たちはどのように火を得ていたのか——原始式火起こしの術を、冬の土曜日の午後、みんなで体験してみた。さらに、野焼きにもトライ。さらにさらに、縄文スープも賞味してみた。ゲストに原始生活史研究家の田中稔さんファミリーをお招きして、小学生やお父さん、お母さんたちにも参加してもらい、「あそびはらっぱ拡大版」で行つた。野焼きする粘土作品は、十一月のあそびはらっぱで作つて、二か月間かわかしておいた。とにかく細かい。小さい。小指の先位のお団子。針金の

ようには細い鼻の象さん。これは、野焼きしたらどうなるのかと心配になり、何度ももつと大きく、太くとアドバイスしたのだけど、子どもたちは“作りたいものを作るんだ”という姿勢を崩さない。S君は、何度も何度も作りなおしては、溜め息ついて「難しい……」とつぶやいている。「これ、いいねえ」と心から言つても「いやなんだ」と言つてつぶしてしまう。とうとう、彼は一番長く粘土をいじつていたのに、作品を作らなかつた。

田中さんは、細かな作品を火の周辺に置いたり、大きな器の上にまとめて置いてたりと、工夫しながら野焼きをスタート。小枝や丸太をうまく組み立てながら、火加減を調節する。同時に焼き具合をチェックしながら、粘土を段々火の中央に入れていく。縄文の人々は、野焼きを一年に一度、秋にしたそうだ。その時に一年間使った土器を全て壊して、新しい土器を焼いたという。

野焼きと並行して、縄文スープ作りと、田中さん



野焼き風景 カット・永田千春

の奥様の提案で突然「パン」を焼くことになる。縄文スープは、里芋、きび、あわ、豚肉（本当は猪）、干しえび、大豆、小魚を大鍋にわかした湯の中に放りこむだけ。味は塩味。縄文の人の食は、山の幸、海の幸を豊富に利用して、保存食も存在したそうだ。スープは、食べやすいように豚肉も使ったので、調味料は塩だけとはいえ、結構おいしくいただけた。パンは、強力粉に細かくしたアーモンドと蜂蜜少々、それに水を入れて、手でこねるだけ。それを小枝の先を包むようにつけて、野焼きの中の火で焼いて食べる。手軽に出来て、ほんのり甘く、お母さんにも大人気。クライマックスは、田中さんの火起こし。田中さんは、原始時代の発火技術（きりもみ式）六秒の記録を持つ火起こし名人。ヒキリ板のくぼみでヒキリギネ（棒）をぐるぐる回転させて、摩擦のエネルギーで熱を起こし、たまたま木くずの熱を逃がさないようにゼンマイの綿やシロカインタケ等で火種を大きくする。大きくなつたら、

燃えやすいスキの穂、スギ皮で包んでぐるぐる腕を振って空気を送りこむと、突然、炎になる——と解説しても、よくわからないと思う。百聞は一見に如かず。田中さんが、私たちの目の前で火をつけた瞬間、「おお」という歎声が起こつた。まるでマジックを見せられたような気がした。その後、すぐにみんなもトライしてみたが、簡単に出来るもんじゃない。ムキになつて棒を回轉させているお母さんもいる。煙りはたつのだけど、火種までいかない。あそびはらっぱの子どもたちもやつてみると、まるで力が足りない。小学生もいいところまではいくのが、だめ。大昔は、火を扱えることは、一人前の証だつたのだろう。今は、火は危ないからといつてさせられないのが一般的だが、火の扱い方を知ることは、生きる力と知恵の原点かもしれない。もっと火と遊ぶ機会を、あそびはらっぱでも持ちたいと思つた。野焼きはとてもうまくいった。素焼きは素朴でいい感じ。灰で黒くなつたり、炎のいたずらで焼け

具合にもグラジュエーションが出来たりして、楽しい仕上がりに、みんな大喜び。でも、中には壺の取つ手が壊れてない、たこの足がない、という声も聞こえてきた。焼け跡を目をこらして搜したけれど、結局出てこない。次回は、大きく太く作ることを徹底してやろうと反省。

それにもしても、野焼きのたき火で『お餅』を焼いて食べてたお母さん、「たき火つていつたら焼きなすよ」と、しつかりしそうが醤油持参で焼なすを食べてたお母さん。遊び心があるっていいな。たき火の煙りの臭いが全身にしみこんだ冬の一日だった。

ふわふわちゃん

今日は、羊のサリーちゃんの毛を、フェルト状にして好きなものを作る。あそびはらっぱでは珍しく、アトリエに机といすを用意し、サリーちゃんの毛、お盆、ビニール、せっけんをセットした。「きょうは、フェルトだよー」という気分ではらつていく。せっけんのツ

ぱはスタート。「つぎ、どうやんの?」「これくらいいいの?」「ねえねえ」と、子どもたちの声がアトリエにうわんうわん響く。千春さんと私は大忙し。お盆の上にサリーちゃんの毛を薄く拡げて、縦横につみ重ね、

お湯でせっけんを溶かして作ったせっけん水

を十分にかける。その

上にビニールを置き、

まん中から外に向けて

手で空気を外に押し出

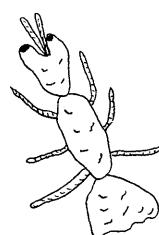
す感じでこする。さら

に、端っこまで丁寧に

やさしくこすつて摩擦

をかけていくうちに、

羊毛はフェルト化され



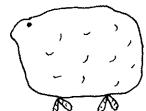
ふわふわかまきり



タコにかいたり



ふわふわゆきたま



ふわふわモルちゃん

ルツルを手の平で感じながら、子どもたちの小さな手はよく動き、楽しく作業はすすんだ。サリーちゃんの毛は真っ白のフェルトになり、子どもたちの力でこすつた程度のふわふわ感がまたいい風合をかも

しだしている。「わあ、ふわふわさんだね」と私が

言うと、「うさぎつくる」「モルちゃんにする（モルちゃんは、幼稚園にいるモルモット）」と声があがつた。幼稚園にいるモルモットやハムスターを観察しに行く子もいるし、図書室から動物や虫の図鑑をもつてきて何を作ろうかと見ている子もいる。なんにも見ずに、フェルトをいじくりまわしながら作るものを見つけ出していく子もいる。創作にもいろんなアプローチの仕方があるものだと実感。さて、虫の図鑑をじっと見ていたM君は「かまきり」に決定。フェルトをかまきり風に細長くして、ひもの足をつけた。K君はフェルトの一部をまるめてみたり、ひもで結んでみたりして、作りたいもののイメージを見つけだそうとしていた。そしてとうとう

出来上がったのが「タコにかいたイカ」。すごい発想。創造力と想像力は、やはり子どもにはかなわない。

キッズアイ

小さな子どもたちの視線から見える世界は、きっと面白いだろうな。小さな子どもたちが切り取るシーンって、どんなだろう。私と千春さんの好奇心はもくもくと膨らんで、とうとう子どもたちにインスタントカメラを渡し、自由に撮影してもらうことにした。まず、本番前に、私たちが撮つたちょっと変な写真を子どもたちに見せた。壁の穴だつたり、足だけだつたり、後ろ姿だつたり、ちょっと不気味な変身写真もあつたりと、バラエティーに富んだもの用意した。そして、「これだあれ?」「これなあに?」とあてっこクイズをした。園長先生の後ろ姿の写真を見て、「T君のママ!」T君も「ママだ」と少しばかみながら答える。うん、後ろ姿は年

齡差をカバーするものかと思いつつ「園長先生です」と種明かしすると子どもたちの目はまん丸になつた。

子どもたちにカメラを渡すと、性格が出て面白い。

い。五分で二十四枚撮り終えてしまつたM君。ゆつ

くりゅつくりスルメをくつちやくつちやかじるよう
に長く時間をかけて撮るMちゃん、Yちゃん、MA
ちゃん。出来上がりは、一九九七年のある一日に、
子どもたちが見た物の記録として大切にしてもらえ
たらうれしいと言葉を添え、棒焼きを展示してお母
さんたちにも見てもらつた。ここで子どもたちの写
真をお見せできないのが残念。近くで撮りすぎてぼ
やけているもの、フラッシュを押さなくて暗いも
の、難はあるけれど、どれも無条件に面白い。

あそびはらっぱの子どもたちとお別れする時に、
私たちが贈ったのは『おもいでこばこ』と『短い
時』を一人に一つずつ。『おもいでこばこ』には、
どんぐりとぶどうで染めたガーゼの一片、野焼きし
た土器の破片、サリーちゃんの毛、みんなで団子に
したしいのみ……あそびはらっぱで一緒に遊んだも
のたちを手作りの小箱に詰めた。Uちゃんが「ずっと大事にする」と言つてくれたのがうれしい。

幼稚園の屋上はらっぱに柔らかいよもぎの葉が頭
を出し始めた。さあ、よもぎ団子を作ろう。四季を
ひとめぐりして、あそびはらっぱは、また冬から春
へ……。
「見上げた窓、その窓の向こうに見える木の枝」
「壁についた手のひらのあと」「水道の蛇口」「足だけ」「布の模様」……大人はけして撮らないモノたちが、すらりと勢揃いしていた。その写真を見ている

と、子どもの時の自分の見ていた世界、目の高さ
が、そこにあるようで妙に懐かしい気がした。そして昔、私も子どもだったんだなあとしみじみ思つた。

*